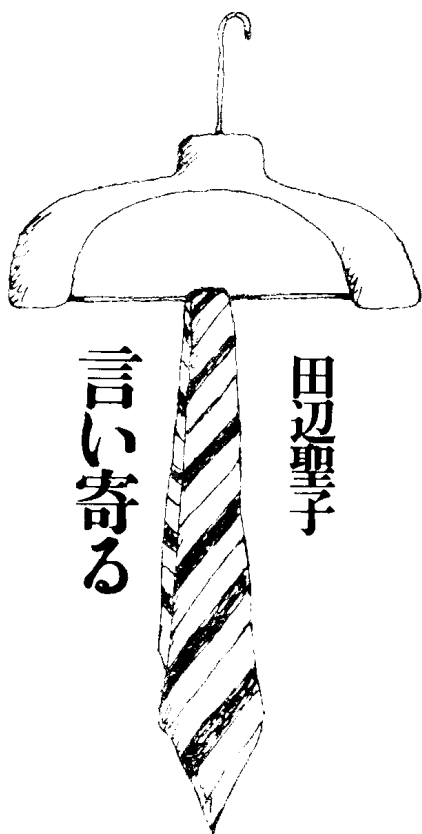




言い寄る

九五〇円

昭和四十九年十一月三十日第一刷
昭和五十五年三月二十日第四刷

著者 田 辺 聖 子

発行者 杉 村 友 一

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三一二三
電話(〇三)二六五一一二二一

本文印刷 理想社印刷所
付物印刷 精興社
製本 和田製本

万一落丁乱丁の場合はお取替え致します

△長篇小説▽

言い寄る

内容目次

惚れた弱み

——それでおたがいに会話をたのしみながら、合間に横目で見て、
(これはお美味そうかどうか) などと考えているのも悪くなかった

7

股眼鏡

——剛は運転しながらいう。「いま、何したいか分る?」「おしっこ?」「オーララ。乃里ちゃんをねじ伏せてやつつけることですワ」

83

お毒見

——「きれいな体。わかいねえ……何べん見ても「はじめまして」という気になってしまふ」「はじめまして、という人は多いでしょ?」

132

熱いお茶

——「それで、一緒に暮らして何すんの?」「朝はまず起きる前に愛を交す」「おなががよじれる。そんな表現、剛ちゃんらしくないよ」

207

キズのいたみ

——五郎にも剛にも、むろん水野にも憎しみはなくて、何かが私の体から、鳥霊になって飛び出していったような気がするだけである

281

言い寄る

惚れた弱み

1

友人の美々が「あいての男」から金を捲き上げる交渉に、私もついていってくれ、というから、ついていくことにした。

「あたし、気が弱いトコあるから、言いくるめられたら、ソレもそうか、と思っちゃう」と美々はいう。

美々は「あいての男」から早くいうと捨てられたのであるらしい。

結婚するというから「仲良く」なったのに、この頃では結婚のケの字もいわないどころか、電話しても、

「居留守を使うし。会社の前で待ち伏せしてると逃げていくし、家へ乗りこんでると、まわれ右して逃げちゃう」
のさそうだ。

「そうか、それは仕方ないね、もう花火を打ち揚げたんやから、一巻の終り、というトコやね」と私が慰めると、美々は素直に、

「うん、花火大会はもう終ったんだ」とまとめた。

しかしすぐ、

「けど、ほんとに結婚するつもりでいたんよ、あたし。それに、アイツには金も使とんねん。あたしのアパートにも、よう泊めたったし、ねえ。いやになったからいうて、逃げられたんじや、立つ瀬がないよ、あんまり、あつかましいのん、ちゃうか」

と力んでいった。美々はちよつとぼつてりした肉づきの、色の白い女で、でも脚はすらりといい恰好をしている。すこしお人好しの気があるので、私はほっとけないのである。美々は一生けんめい、平気なふうによそおっているが、本当はアイツに捨てられてかなりの打撃だったらしく、半月ばかり鬱状態になっていた。

ときどき私の事務所へきて、

「これは歯痛よ」

などごまかしていたが、顔が腫れて、いつ見ても赤い目をしていて、あれはひょっとしたら、泣き腫らしていたのかも知れない。

美々は本町にある生命保険会社のOLである。

私も、数年前までそこにいた。その会社での同僚である。わりに仲良くしていたので、私が辞めてからもずうっと、遊んだり相談にのったり、飲んだりする友達である。

私は、いまは、いろんなことをやって食べている。子供服と、それからおもに若い娘の服のデザイナー、下着、小もののデザイナーでもあるし……イラストの仕事もあるし、自分で縫いぐるみの動物や人形をつくることもあるし。(その中のいくつかは、子供用品専門の会社を買って量産している)

なんで保険会社を辞めたかというところ、あそこはお給料はいいのだが、本社から大阪府下の小さな町の支社に転勤させられて、そうすると女ばかり多い職場のこととて、わずらわしくて、ちっとも面白くないからだ。

尤も、それは本社もそうで、男は、ことに独身の若い男は少なくて、みんなせつせと、社外の開拓を心がけていた。

でも、なかなかいいのにあたらないうちに、お給料のよさにひかれて辞めないうちで働いてると、ついウカウカとハイ・ミスになる、という段どり。

美々はもう、二十七である。私より若いけれど、いつも結婚にあこがれてるから二十一、二

の娘とちつともかわらない。

それで、美々なんかダマすのはわけないと思える。

私はそれまで、美々からうれしそうな打ちあけ話を聞かされていた。

「技術屋さんなんだ、いつも油臭うてね、ヒッヒッヒ」

なんていう。

「そうね、どういいますかね、技術屋の男っていうのは単純明快でね、もってまわった言い方、せえへんよ。そのスパッとしたとこ、ええよ、ヒッヒッヒ」

などともいう。――で、私は、美々もこれでいよいよ年貢の納めどきがきたかな、なんて考えていたのだ。

「うらやましいやろ、乃里子」

と私にいうので、うんうん、といってあげた。私は老人子供に席をゆずるほうで、目くじら立ててほんきに美々とわたりあったりしない。

その、ちょっと不安定な友情は、美々の子供っぽさ、お人よしからきている。

だから美々が、顔を泣き腫らして「あいての男」をとっちめるといふと、これはついていかなうてはしょうがない。

どういってとっちめるかということになって、

「妊娠したから、おろすお金おくれ、いうたらどう？」

と私はいった。

「ウン、そういつたら出すかもしれないね」

「そいつ、シブチン（けち）なの？」

「ウン、その気あり」

「じゃ、恐喝がかった方がいいね、やっぱり」

「金、出さへんのなら産む、と」

「氣ばってフタゴ産む、っていえば？」

「父の名はカイ・タカユキとかいて交番の前に捨てとく、いうたるわ」

「カイ・タカユキというのか。技術屋にしては、しゃれた名やないか、勿体ない」

「ええのは名前だけや」

私たちはそれから、いろいろ打つ手を考えた。美々がまだそのカイ氏に未練を持ってるのなら、ほかの手を考えるべきであるが、美々は惚れっぽいくせにあきらめっぽく、もう捨ててもいい、という。ネバリ不足であるが、私が拾うのならともかく、そう苦労して、ことさらくつつけることもないので、すこし慰藉料とって別れた方がいい、という結論に達した。慰藉料といても向うが払うかどうか疑問だけど。こっちが勝手にそう称しているだけで、向うは向うの言い分があるかもしれない。

「最後に仲良くしたのはいつやのん？」

私は鉛筆をひねくりながらいった。

「三週間ばかり前」

「そんならいけるやろ、一年も二年も前やと、この手は使えない」

「何ぼぐらいとったろ？」

「相手の出方次第ちゃうのん？」

私たちは前祝いにビールで乾盃した。

カイ氏は電話で呼び出しても出てこないというので、私が電話することにした。

でも二、三日はいそがしくって忘れていた。ちょうど、子供服の冬オーバーのデザインを五、六枚かかなくてはいけなときで、デパートからもせかされていたし。

美々からとうとう、電話がかかった。

「タアちゃんが出て来やへんから、その友達のゴウに電話して、引っぱり出すことに成功したよ」

という。

「タアちゃんとは誰や」

「カイ・タカユキなんだ」

「捨てられて未だにそんな甘い呼び方してんのか、オマエもおめでたい女であるのう」

「これは口癖ですよ。ともかく友達のゴウというのが、連れてくって約束してくれたよ。こん

どの日曜、来てくれるね」

「どこ？」

「梅田の阪急ホテルのロビー」

そんなところで、中絶費用がどうの、フタゴを産むの、交番に捨てるのとかけ合うのは如何なものであろうかと思つたが、仕方ないので私は当日、出かけた。いつもはジーパンにＴシャツかセーター、冬はそれに皮の半コートを引っかけただけで、お化粧もせずオカッパあたまでうろついてる（こうやってると三十には見えない）んだけど、今日はナメられてはいけないと思うので、優雅なシルバークレイのちりめん地の、ミモレ丈のドレスに、金の腕環、金のラメの靴におそろいの小さなハンドバッグといういでたちで、人工マツゲにかつらまでかぶって、出かけた。

ちよつと早めの時間にいったのであるが、美々はもう来ていて、絨毯を蹴立てて走ってきた。これは白い夏らしい半袖のコットンの服を着ていた。

「テキはいるの？」

「まだらしいわよ」

美々は私をじろじろ見て、

「うん、すこし凄みあるね。あたしがつまったら横から口出してよ」

「黙ってても威厳あるやろ、正体不明の女いう感じでさ」

そのとき、私の方が先に、こちらへやってくる二人の男をみつけた。一人は背が高く腕力が強そうで、動きの早い脚と、荒けずりな骨格をもった青年、一人は、にこにこして愛想のいい、ちよつと肉のつきすぎた、まるい体つきの青年だった。

そのまるい体つきの青年の方が、美々に、

「やあ」

と挨拶した。美々は二人に挨拶して、私を、

「友達の、玉木乃里子。デザイナー」

と紹介した。それから、まる顔の、まるい体つきの男にウィンクして見せ、私に、

「タアちゃん。これが」

と紹介した。

それで私はすっかり、気がおかしくなってしまったのだ。にこにこしている方が、介添というか附添というか、友達の方だと思ったのだ。

そんな愛想がいいはずない、と思つたのだ。

「タアちゃん、ここへ坐りはったらは？」

と美々がいい、それは「お坐りになつたらいか？」という意味の大阪弁なのだが、そういつて横の席を媚こびのある手付きで叩いたりしている美々を見ると、（やれんなア）という感じ、ほんとに金を捲き上げるなんてことできるつもりかしら。